北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1998. 5. 11

第20巻1号

通巻145号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

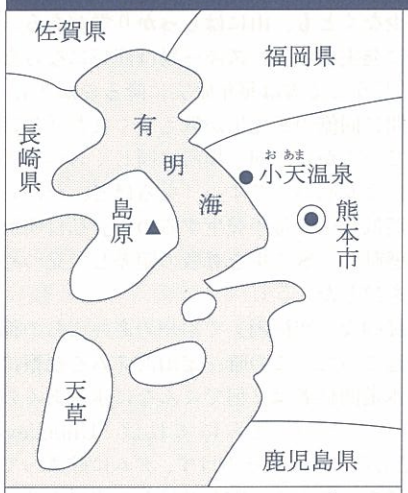
失楽の痛み癒して一気に書き上げた花の草枕

花が春の里を彩っている。
菜の花に山桜。
花カイドウに木蓮。
深山椿に木瓜(ボケ)の花。
ミカン畑から遠く有明の海が見える。
夜になった。
湯に入る。

「室を埋むる湯烟(ゆけむり)は埋めつくした
あとから絶えずわき上る」。
その至福の時に、
「朦朧と、黒きかと思わるるほどの髪をぼかして、まっ白な雲の底から、次第に浮き上って来る。その輪郭を見よ」。

次の瞬間、
「ホホホホ……」
と云う声と共に階段の中に消えて行く。
その人こそ、漱石が危機に陥った女性ではなかったか。
明治30年。漱石30歳。

書彩生彩



邦古井の湯　小天温泉

―ときには湯けむりのアンダンテ（ゆっくりと）①

訪れた小天(おあま)温泉は冬であった。
それから9年。明治39年。
冬の小天(おあま)を春の小天(おあま)に変えて一気に書き上げた『草枕』。
この時、漱石の心に青春のあらしが吹き荒れていたのではないか。

（関連読み物　p. 6－7）

■ p. 2．水の話(1)（余湖典昭）　■ p. 3．気楽に読もう
■ p. 4－5．激動期の図書館とともに（中川かず子）　■ p. 8．旬を読もう（K.K.）

水の話　(1)

雪の恩恵

余　湖　典　昭

長い冬がやっと終わった。雪かき、屋根の雪下ろし、交通渋滞、ツルツル路面。毎年紅葉の季節を迎えると、どんなにもがいても毎年やって来る冬を思い憂鬱になる。「まるで、借金取りと同じだ！」などど思いながら溜息が多くなる。

忘れもしない2年前の1月9日朝、記録的な豪雪に見舞われた。近所のおばあちゃんが「ホントニ、雪が降って喜ぶのは、子供と犬だけだ。」とブツブツ呟きながら犬と散歩をしていた。雪かきに悪戦苦闘中の私は、「ホントニ、ホントニ」と心の中で同意していた。

「空梅雨」とは言うが、「空雪」とは言わない。たとえ平地で雪が少なくとも、山にはしっかり雪がある。「空雪」が頻繁に発生すれば、スキー場は商売にならないのである。「どうして雪は毎年確実に降るのか？」、この素朴な疑問に同僚のS先生が教えてくれた。「冬は気流が安定しているから、同じ場所に同じくらいの雪の降る確率が雨より高いのです」。「なるほど、だからあの憎き石狩湾低気圧も毎年発生するのか」。私は明解な教えに痛く感動し、S先生を尊敬の眼差しで見つめながら研究室を辞した。

数年前、記録的な「空梅雨」で本州のあちこちの都市で水不足が起こった。この時、定山渓ダムを視察に訪れた本州の水道関係者は、「何でこんなに水があるのか！」と驚愕したとか。彼らにすれば「Unbelievable！」なのである。それもそのはず、ダムに貯まっている水は実は雪なのである。雪が融けたら水になる。だから水が貯まっているのである。

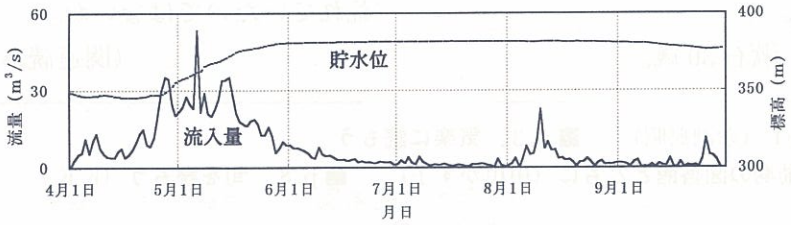
北海道の河川は、冬の間の流量は少ない。雪が融けないからである。融けないから我々の生活に様々な障害をもたらすのだが、山に降り積もった雪は、天然のダムと考えれば良い。春になるとこの天然ダムが一斉に放流を開始するのである。4月から6月の融雪の水量は、河川の年間水量の半分以上に達する。この融雪が我々の生活にどのような恩恵を与えているのか、定山渓ダムを例にして考えてみよう。

国際スキー場に行く途中、ちょっと車を止めてダム湖（さっぽろ湖）を見てほしい。1月ともなれば湖は全面結氷し水墨画の世界が広がる。新緑や紅葉とは違った美しさである。よく見ると、湖の水位は夏よりも下がっていることに気がつくと思う。図を見て頂きたい。この図は定山渓ダムの貯水位、流入量を示している(1997年4月から9月)。冬の間、貯水位は次第に下がり、4月に最低となっている。融雪が始まると水位はどんどん上昇し、6月には約35m上昇し満水となる。さっぽろ湖の最大深度は80m程度である。「その内の半分弱か、大したことないな」と思ったら大間違い。湖の断面は楔状になっているから、水位と容積は1対1に対応しない。概算すると、貯水量は2.3倍に増えているのである。実は融雪の水は全部貯めているのではない。随分放流もしている。仮に4月に貯水池が空になったとしても、どんなに雪が少ない年でも、6月には満水になることは間違いない。雪の多い年では、融雪期の放流量が貯留量を上回ることも珍しくないのである。

このように考えると、我々の生活は雪に支えられていると言っても過言ではない。ブツブツ文句を言わずに、「有難い有難い」と感謝しながら雪かきをし、渋滞に耐えなければならないのである。

人間の欲望には限りがない。特に年齢を重ねるほど欲深くなって行くようである。人間にとって都合の良い部分のみ追求し、他を排除する姿勢がどこまで通用するのか。水の分野でも、最近雲行きがかなり怪しくなってきた。地球上には人間以外の生き物も住んでいる。そんな話は次回！

（よご　のりあき　工学部土木工学科教授）



定山渓ダムの流入量と貯水位の変化（1997年）

気楽に読もう！

「ミス・サハラを探して」
島田雅彦著（K. K. ベストセラーズ）

本屋でみつけたとき「島田雅彦の本が出たんだ」と、中身も見ずに買ってしまった本です。島田雅彦の小説のファンである私は、勝手に小説と思い込んでいたのですが、家に帰って開いてびっくり、旅行記なのでした。

とは言っても、そこは島田雅彦です。行き先もチュニジア、サハラの蜃気楼にアッラーの幻影を追う放浪譚。物と時間に縛られ身動きのとれなくなってしまった日本人に全く別の価値観を教えてくれる本です。

緩やかな時間軸の中で、怠惰や退屈と優雅に馴れ合っていられる民族と怠惰や退屈を恐れ、何らかの言葉やそれを紛らわせなければ居られない者たちとの違いに、カルチャーショックを受けました。

日頃時間に追われ、仕事に追われ、たまに暇ができても次々と用事をみつけて忙しがっている私ですが、砂漠に行けば私もボーッとしていられるような気になります。

究極の旅先は何もないところ。砂漠と襟裳岬なのです。とは言いながら旅にも行けない忙しいあなた、せめてふんだんに盛込まれた砂漠の写真をながめながらボーッとしようではありませんか。(T. M.)

「子どものトラウマ」
西澤哲著（講談社現代新書　1376）

私が興味のあるもの、それは子供です。

でも、子供好きなわけではありません。子供はうるさいので嫌いなほうです。毎日のように子供が起こした事件がテレビや新聞に登場しています。それで『どうしてそんなことをするんだろう？』と思うからです。

そこでこの本を読むと、犯罪、特に殺人を犯した子は、大人の虐待によって精神を傷つけられ、魂を殺されてしまったのではないかしら、と思えてきます。もちろんそれだけではないとも思えます。残虐性の強いビデオをくり返し見て、学習してしまったのかもしれません。私はみんなにもっと子供のことを気にかけて欲しいと思います。自分達と同じ人間だということに気付いて欲しいです。社会に出れば、子供ほど年齢の離れた人々と仕事をする時が必ず来るでしょう。その時の為にもこの本を読んで、子供のことを考えて欲しいと思います。(K. M.)

激動期の図書館とともに
――この二年の歩み

中　川　かず子

二年前の平成８年５月のこと。学会出張で上京する機会を利用して、在京の大学附属図書館をいくつか見学させていただこうと思った。我が北海学園大学とほぼ同規模の図書館ということで、青山学院大、学習院大、成蹊大を訪問することになった。学生数や年間図書受入数は本学とそう変わりはないものの、伝統のあるこれらの図書館からは学ぶところが多々あった。明治、大正、昭和にわたる主要の雑誌、新聞がずらっと並べられた書庫。また、ある大学では全館ほとんどを開架式にして利用しやすい空間を設けていた。サービス機能の充実を優先する努力が感じられた。閉架書庫に入室が認められる学生は、一般に、大学院生と研究生に限られるが、卒論作成の学部生にも認めるところがあった。こうした情報を参考にさせていただき、本学図書館でも、平成８年６月より卒論作成のために学生が書庫を直接活用することが可能になった。

大学図書館訪問は、継続的に行ないたいと思いながらも、日々の業務に追われて実現しなかったが、慶應義塾大学メディアネットだけはその翌年に訪問できた。ここは、図書館職員一人当たりの学生数、図書受入冊数が全国平均をかなり下回る、つまり、職員が余裕をもって様々なサービスに当たれる、全国的にも高水準を誇る図書館である。施設、設備はもとより、レファレンス要員の充実ぶりと自信と誇りに満ちた職員達を目のあたりにして、理想的な大学図書館のイメージを絵に描いたような印象を受けた。残念なのは、札幌市内と道内の私大図書館へは訪問が後回しになり、結局間に合わなかったことである。しかし、この３月に、北海道地区私立大学図書館協議会が念願の「会報」第一号を発刊し、道内の私立大学図書館の状況と動向を詳しく知らせてくれているのは有り難い。全国的な流れでは、私立大学図書館協会の館長・事務長会議がそれぞれの大学図書館の情報交換の場になっている。ここ10～20年の私大図書館の歩みの中で注目されるのは、図書館の相互協力体制の推進とそれに伴い発展してきた学術情報センターを中心とするネットワーキングであるが、情報化時代を背景に、各図書館のシステム化と図書館間の連携が非常な勢いで進んでいるのを実感している。昭和56年以降の私立大学図書館協会東地区部会「館長・事務長会議」におけるテーマを見てもわかるように、「図書館の相互協力」と「学術情報サービスのシステム化、ネットワーク化」がこれまでの大学図書館を巡る議論の中心的な話題になってきた。大学図書館は、今や大学固有の知的データバンクとしての機能に止まらず、図書館間で知的資源や情報を共有し合う時代に入っている。したがって、それぞれの情報資源を対等に交換できるのでなければ、真の相互協力であり得ない。こうして、ここ10年ぐらいの間に全国の大学図書館の電算化システムがほぼ完了し、資料のデータ化が進み、各図書館に特有の情報資源を相互に供給し合う体制が整ってきた。しかし、今なお設備が整わず、資料の分類や目録カードを手作業に頼るような図書館は、今日の情報化時代では相互体制の中に対等に組み入れられないことになる。本学図書館は諸々の事情により、電算化の導入が十年以上も立ち遅れ、他大学図書館に相互協力の面で迷惑をかけてしまっている。本学には、「北駕文庫」を始め、寄贈図書も含めた大型コレクションがいくつか書庫に所蔵されているほか、年間の受け入れ図書も23,000冊以上にのぼり、現在、600,000冊の蔵書を抱えるほどの大きな規模を誇っている。こうした「宝物」の数々の所蔵を速やかに確認したいと願う研究者や学生も多いはずである。一日も早く電算化を実現し、他大学の人々にもそれらを活用する輪が広がっていくこと

を願っている。

相互協力の目的は知的資源の共有だけではない。プロの図書館職員としての知識や技能を高めたり、図書館の機能の改善のためにも、図書館間の情報交換が積極的に行なわれているのである。「私立大学図書館協会、自己点検・評価手法ガイドライン委員会」は平成6年の「新私立大学図書館改善要項」を具体的な改善目標に設定するため、平成7年に組織されたわけだが、平成9年3月には標準化された手引き書を完成させた。現北海学園法人事務局長の新妻浩氏（当時、図書館事務部長）が、全国の私大図書館の「ガイドライン」委員のまとめ役として獅子奮迅の活躍をされたのは記憶に新しい。また、同委員会の委員の方々は遠く北海道までやってきて、最後の仕上げに知恵を絞り合った。人里離れたところで、しかも、熊でも出てきそうな奥地に隔離され、3日間の集中合宿をこなした委員の方々の忍耐力に脱帽した。

一昨年8月の図書館法施行規則の改正は、全国の司書養成課程に続々変革をもたらしたが、本学図書館学課程も再認定を受け、今年度より新課程がスタートする。今回の法改正の主要な目的が、生涯学習の機会の拡大と情報化社会への対応という点にあることは周知の通りである。しかし、同時に、専任教員の増員、コンピュータ等の機器の整備、図書館における実習等も必要条件ではないが強く求められてきた。本学の場合、規模こそ大きくはないが、昭和45年以来社会人に門戸を広げてきただけに、再認定の申請過程では新課程の充実を期待する声援を学内外から受けてきた。社会人の場合は、道内、道外の図書館員（または経験者）も含まれることから、講座修了後のネットワーキングが比較的やりやすい。また、これまでの「実習」授業、特に、参考業務演習や資料分類法などで図書館職員の協力（教授補佐、資料準備など）が得られてきた。図書館員の資質向上に役立てるよう、「司書教育補佐」も日常の業務の中に組み込まれるのが望ましいと考える。現実には、将来の「講師」の可能性も含めて厳しい条件も多いが、経験の豊かな館員による具体的な技能の伝授は後輩にとって身近でわかりやすいものである。新課程の特徴で見落とせない点がほかにもある。それは、「図書館サービス論」を始め、「サービス」という文字の付加された必修科目が4つも並んでいることである。また、それにも関連するが、必修選択科目の「コミュニケーション論」がそれまでの「マスコミ論」から〝interpersonal communication〟を重視する内容に指定されたことも注目される。つまり、人とのコミュニケーションを含めた利用者へのサービスの強化が望まれているのである。機械化が進み、人間不在の作業の広がる今日の状況だからこそ、人間的なコミュニケーションと知的サービスが図書館員に求められてくる。とは言っても、現実の館員の置かれている状況は理想とはほど遠い場合が多い。本学図書館にしても、年間の開館日が286日（日、祝祭日、大学休日を除く毎日）、専任職員一人当たりの奉仕学生数が700人（全国平均では360人程度）という厳しい現実の中で館員達は日々の仕事をこなしている。単純で機械的な作業に忙殺されていては、心の余裕ももてず、人間的なコミュニケーションどころではなくなる。しかし、このような厳しい環境の中でも、図書館員の親切な対応やアドバイスに感銘を受けたという報告をいくつかいただいている。利用者の励ましと館員の使命感がこれからの図書館を支えていくことになろう。

この2年間に寄贈していただいた貴重な図書資料は現在整理作業中で、過去の寄贈図書を含めて一日も早く利用に供されることを願っている。また、人文学部の開設以後、カナダ関連図書がカナダ大使館から、英国文化関連図書と視聴覚資料がブリティッシュカウンシルから寄贈を受けている。外国からの客員研究員や専任教授、外国人留学生の方々の図書館利用も増えてきたことから、図書館でも「図書館ガイド」や事務的な案内の英語版を用意して図書館の利用を促している。これからの大学と大学図書館の発展の中で、情報の国際化が一層推進されると思われる。外国からの研究者、教授、留学生の声にも大いに耳を傾けていくことが望まれる。

(なかがわ　かずこ　人文学部教授　前附属図書館長)

事実は小説よりも奇なら恋はいつもミステリー

村人たちのうわさでは、
邦美さんは奇人であり、変人という。
それも男まさりの。
画工はしかし、そうは見なかった。

「あの女をのぞいて見ると、
あの女は今まで見たうちで、
もっとも美しい所作をする。」
他方で、
画工は彼女との関係を
「非人情」の間柄として己れに果たすのである。
「細い虹の糸が
井戸縄のように太くなったら？
そんな危険はない。
余は画工である。
先はただの女とは違う」。

画工は邦美さんの中にミレーのあの「オフェリア」の絶望にも似た美を見い出そうとした。
邦美さんの中に欠けているものが一つだけあるとすればそれは、「あわれ」であった。
その時がいつ来るのか？
画工はそれを待っていた。
ある時、画工は邦美さんの父親から茶話の招きを受けた。同席した若者は甥だった。

「老人は当人に代って、
満州の野に日ならず出征すべき
この青年の運命を余に語げた。
この夢のような春に、
啼くは鳥、落つるは花、わくは温泉のみと
思い詰めていたのは間違いである」。

この老人こそ、邦美さんの父親、前田案山子。
邦美さんは、前田卓子であった。
案山子は、土佐の中江兆民と盟友した自由民権の士であり、熊本選出の代議士だった。温泉宿は彼の別荘でもあった。

若者の出征の日。
皆が停車場に見送りに行った。
汽車の窓から若者の顔がかくれて間もなく、あの「野武士風」の男が顔を出した。ミカン畑で、邦美さんからサイフをもらった元亭主であった。
その時、邦美さんの顔にあの「あわれ」がのぞいた。画工は思わず言う。
「それですよ！　それですよ！」
その瞬間に、画工の絵は成就する。

漱石が小天に遊んで、しばらくして、夫人は入水自殺未遂事件を引き起す。
漱石はあわただしく、ロンドン留学へと旅立った。「危険」はあったのである。

事実は小説よりも奇なら、恋はいつもミステリーではあるまいか？

文豪知求紀行

—続・戦争と平和の世紀みつめて

①
日本・夏目漱石

「日本亡ぶ」を予言した反骨の小さなすみれ

明治39年。春。

漱石39歳。

ロンドン留学から帰国して3年。

小天から9年の歳月が経った。

漱石の胸になお、うづくものがあった。

それは、啄木が詠んだような

〜　砂山の　砂に
　　砂に　腹這い
　初恋の　痛みを
　　遠く　想い出ずる日。

と全く同じ感情であったろう。

その上になお、耳元に残って離れない声が聴こえる。

「あなたは
　余つ程度胸のない方ですね」。

のちに、『三四郎』の中で、あのナゾの女に言わせた言葉だった。

この言葉こそ、

実は小天で前田卓子から直接、漱石が耳にしたはずの言葉である。

言外にこめられた意味こそ、

「なぜ、私と一緒になれないのですか？」

ではなかったか。

漱石の作品を貫らぬいているトーン。

それはマドンナの、美禰子の、藤尾の中の卓子である。

森田草平が訪ねて来た。

「先生、どうやら前田卓子は宮崎滔天宅にいるようですよ」

「結婚したのかい？」

「いえ、彼女じゃなくて、妹さんの槌子さんが滔天と結婚したんですよ」。

草平はこの情報を恋仲だった、平塚雷鳥から得ていたのだろう。

「案山子に滔天か」。

「孫文をかくまっているらしいですよ」。

「そうか。あの人も大陸へ行くんだろう」。

草平は、漱石の眼の中に、何かキラリと光るものを見逃さなかった。

宮崎滔天は前田案山子同様、肥後熊本の自由民権の士であった。

その子、龍夫は、東大在学中、華族で、天皇のいとこに当る柳原燁子とかけ落ちをして、結婚。彼女こそあの、歌人、白蓮だった。

『草枕』ではこの国の「危うさ」を、『三四郎』では、この国は「亡ぶ」と書いた漱石の反骨は伊予の子規と、肥後の「もっこす」にある。

翌、明治40年。近代日本の「配電盤」（司馬遼太郎）としての東大を去った。

菫程な　小さき人に　生れたし

真の知者は野に人知れず咲くものである。

「旬」を読もう……『経済小説』へのご案内

高杉　良　『金融腐蝕列島』(角川文庫、1997 年)　『小説新巨大証券』(講談社文庫、1997 年)

MOF、MOF 担、局長通達、日銀特融、財テク、CEO、とばし、どぼん、損失補塡、総会屋、企業舎弟、公的資金投入、等々。最近耳慣れない〝用語〟を見たり聞いたりすることが多いと思います。これらは最近の一連の金融・証券不祥事でよく出てくる言葉で、もちろん、上記の著書の中でも詳述されています。あなたは幾つくらい正しい内容を御存知でしょうか。

著名な経済評論家である佐高信は、自分自身の「経済小説」への関心について、その著書『経済小説の読み方』(現代教養文庫、社会思想社、1986 年)の「あとがき」で次のように述べています。

「七年前まで、故郷の山形県酒田市で高校の教師をやり、生きた経済の実態をほとんど知らないままに経済雑誌の編集に携わることになった私は、手っとり早く企業や日本経済の生態を知るために、城山三郎、山崎豊子、清水一行、森村誠一、アーサー・ヘイリー等の小説を片っ端から読んだ。それは、同時に読んだ学者やジャーナリストの書くものより、ずっとおもしろく、またナマナマしかった。そこには、生きている人間が動かしている企業を、生きているままにとらえようとする『作家の眼』が光っていたからである。事実をただ積み上げても『真実』はとらえられない。『事実は小説より奇なり』とも言われるが『真実は虚構を通してのみ語られる』とも言えるのである。」と。

佐高信は、この著書の中で「高杉作品は、極く稀れにエラーが見られるにしても、志賀直哉を愛読したためか、文章もおいしいし、濡れ場も浮いていない。しかし、悪役を彫り深く描くことに関しては、もう一つ物足りなさが残る」と評しています。この場合の「彫り深く」とは、「典型的な・レッテル通りの悪人」という内容を越えた「超・悪人」の意味である。

佐高氏の評価から約 11 年の歳月が経っているが、高杉作品はどのように変化したであろうか。最近の『金融腐蝕列島』や『小説新巨大証券』では、金融・証券界の実証に裏打ちされた内容はいうまでもなく、まさに生きている人間が動かしている企業を、生きているままにとらえようとする「作家の眼」の光にはますます磨きがかかっているようである。ただし、「悪役を彫り深く描く」ことにはいまだに躊躇が感じられる。高杉の理解の中には根からの「超・悪人」は存在しないし、基本的には「悪人」を描きたくないのであろう。このことは高杉作品の読後感に、やはり若干の物足りなさを感じるかもしれない。(K. K.)

北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.20　No.1 (通巻 145 号)
本館　〒062-8605　札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号　工学部図書室　〒064-0926　札幌市中央区南 26 条西 11 丁目
☎ (011) 841－1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814　印刷所：㈱アイワード